

3 善光寺平の埴輪

森將軍塚古墳や、土口將軍塚古墳等の発掘調査によって、埴輪の様相も次第に明らかとなってきた。今後こうした調査成果に基づき、古墳の年代や変遷について検討を行うために、ここで土口將軍塚古墳を取りまく善光寺平南部地域の円筒埴輪を中心に改めて整理を行った。また、川西宏幸氏が行った（1）円筒埴輪の編年に基づき編年を試みた。

1、森將軍塚古墳 更埴市大字森 前方後円墳（全長約100m）

昭和40・42・43年の調査以後、昭和56年から古墳の保存整備事業によって全面発掘調査が実施されている。埴輪は、樹立原位置を保つ出土例は少ないが総重量3,000kgにもおよぶ埴輪片が出土しているほかに、古墳を取りまく12基の埴輪棺からも出土している。器種には、円筒・壺形・朝顔形埴輪をはじめ、特殊器台形埴輪の流れを汲むもの、家形あるいは圓形埴輪と考えられる方形を呈する形象埴輪があるが、復元されていないので詳細は未だ不明である。

円筒埴輪の特徴 ①外面2次調整は、タテ・ナナメハケ調整が施されている。②透孔は、三角形のものが千鳥に多数穿たれている。巴形のものが極一部あるほかに、全く透孔の穿たれないものもある。③凸帯は、突出度が強くその製作にあたっては『善光寺平型埴輪』と提唱されている擬口縁状に造りだされるものがある。条数は、3条が基本である。④黒斑がある。⑤個体毎に形状が異なり、口径40cm、器高80cmと大型である。

こうした特徴から川西編年I期に相当するものと考えられる。

2、川柳將軍塚古墳 長野市篠ノ井 前方後円墳（全長93m）

昭和4年に刊行された『川柳將軍塚の研究』において「此の埴輪には厚薄二種の作を見る。」と紹介されているのみである。表採資料に少量の円筒埴輪片があるのみで、詳細は不明である。

表採された円筒埴輪の特徴 ①外面2次調整は、タテ・ナナメハケ調整が施されている。②凸帯は、断面台形の貼り付け凸帯である。③黒斑がある。④器厚は、0.8cmと薄手である。

埴輪棺の特徴 ①外面2次調整は、タテ・ナナメハケ調整が施されている。②透孔は、大きな三角形のものが2孔穿たれている。③凸帯は、突出度が強く擬口縁状に造りだされたものと考えられる。条数は2条である。④黒斑がある。⑤形状が橢円形を呈しており、口径38×48cm、器高80cmと大型である。

こうした特徴から、川柳將軍塚古墳前方部付近で発見された埴輪棺は、川西編年II期に相当するものと考えられる。本埴輪棺が、川柳將軍塚古墳の陪塚と考えるとすれば、川柳將軍塚古墳の円筒埴輪は、本埴輪棺より古くI～II期相当とするのが妥当と考えられる。

3、倉科將軍塚古墳 更埴市大字倉科 前方後円墳（全長73m）

昭和59年更埴市史編纂事業の一環として、前方部南側くびれ部付近の部分的な発掘調査が行われた。出土した埴輪片は、器面が荒れた小破片のみで詳細は知り得ない。かつて、水鳥・人物等の形象埴輪が出土したことである。⁽⁷⁾ 調査でも扁平な板状の埴輪片が出土しており、形象埴輪の存在を知る。

円筒埴輪の特徴 ①外面2次調整は、タテハケのほかにB種ヨコハケが施されている。②透孔は、方形と円形がある。③凸帯は、断面台形ないし三角形を呈した貼り付け凸帯である。④黒斑がある。

B種ヨコハケがあることから、川西編年III期に相当するものと考えられる。

4、森2号墳 更埴市大字森 円墳（径20m）

昭和43年のトレンチ調査後、昭和61年に再び全面発掘調査が実施され、古墳の全容が明らかにされた。⁽⁸⁾ 墓輪は、墳頂及び、裾部では0.8~2.3m間に円筒・朝顔形埴輪が樹立されていたが、形象埴輪はない。

円筒埴輪の特徴 ①外面2次調整は、一部のものにタテハケ調整があるものの、タテハケ1次調整のみのものが多い。②透孔は、方形のものが多く、わずかに三角形のものがある。③凸帯は、断面台形及び凸帯側面を丸くしたものがあり、全て貼り付け凸帯である。条数は2条である。④黒斑がある。⑤個体毎に形状が異なり、口径23~32cm、器高45cm~58cmと大きさにもばらつきがある。

調査者の岡林孝作氏も説くように古い様相ではあるが、2次調整の省略がみられること、TK73~TK216型式併行の須恵器が出土していることなどから、川西編年III期に相当するものとするのが妥当と考えられる。⁽⁹⁾

5、越将軍塚古墳 長野市篠ノ井 円墳（径33m）

昭和53年に行われた発掘調査によって、埴輪片が墳丘及び周辺より出土している。しかし、その出土量は、部分的なトレンチ調整ではあったが少ないもので、器種等も詳細は不明である。⁽¹⁰⁾

円筒埴輪の特徴 ①外面2次調整は、タテハケ調整が施されるものがあるが、ナデ調整ないし省略されている。②透孔は、方形のものがある。③凸帯は、上側に大きく突出する貼り付け凸帯がある。④黒斑がある。

タテハケ1次調整のみのものがあること、方形の透孔があることなどは森2号墳例に類似しており、同様に川西編年III期に相当するものと考えられる。

6、長礼山2号墳 長野市松代 円墳（径16.6m）

昭和49年に発掘調査が行われ、円筒・朝顔埴輪と共に家形・楯形埴輪が出土している。また、人物・水鳥・動物を形どった土偶状の土製品も出土している。⁽¹¹⁾

円筒埴輪の特徴 ①外面2次調整は、タテハケ・B種ヨコハケが施されている。②透孔は、方形と円形がある。破片の中には、凸帯をはさんで両者の透孔をもつものがある。③凸帯は、断面M字形のものと台形を呈するものがある。④黒斑がある。⑤口径15.6~44cm、底径19.4~37.8cmを測り大小2種類の円筒埴輪の存在が考えられる。

こうした特徴から、川西編年III期に相当するものと考えられる。

7、四ツ屋遺跡 長野市松代 祭祀遺構（？）

昭和35・47年の調査によって直径20mの周溝と共に埴輪列の一部が検出されているが、その詳細は不明なところも多く、調査者は、「古墳ではなく、特殊な祭祀遺構ではないかと考えるに至った。」⁽¹²⁾と報告しているものである。また埴輪列の内側から、土師器の高壇・壇・須恵器の把手付壙(TK216~208型式併行)が出土したこと、さらに鶏の頭部のみの形象埴輪が採集されたことも報じている。

円筒埴輪の特徴 ①外面2次調整は、B・C種ヨコハケが施されている。まれにA種ヨコハケと思われるものがある。②透孔は、円形が多いが、縦長の長方形を呈するものもある。また、三角形のものもあったとのことであるが、確認できなかった。③凸帯は、断面台形状である。④明瞭な黒斑が認められるが、窯窯焼成とも考えられる程焼成は良い。⑤底径は、21~24cmである。

ヨコハケが多用され、C種ヨコハケがみられることから、川西編年IV期に相当するものと考えられる。

8、腰村1号墳 長野市篠ノ井 前方後円墳（全長43m）

本古墳は、発掘調査が行われておらず詳細は不明である。昭和53年長野県史編纂事業の一環で墳丘測量が実施された。その折表採されていた円筒埴輪片についても詳しく調査された。⁽¹³⁾

円筒埴輪の特徴 ①外面調整は、タテハケ1次調整のみである。②透孔は、円形である。③凸帯は、低いM字形である。④黒斑はない。⑤底部調整はない。

調査者は、こうした特徴から川西編年V期の古相に相当するものと位置づけている。

以上善光寺平南部地域の円筒埴輪の特徴を紹介し、川西編年に基づき編年を試みてみたが、III・IV期相当としたものに多くの問題が残る結果となった。なお、本報告書で紹介した土口將軍塚古墳の円筒埴輪は、川西編年III期に相当するものと考えられる。

III期としたものの中で、外面調整にヨコハケを施す倉科將軍塚古墳・長礼山2号墳と、タテハケ1次調整を主体とする森2号墳・越將軍塚古墳との前後関係は不明である。前者の透孔は円形・方形であるのに対し、後者は方形・三角形でありより後者のものが古く位置づけられるのであるが、後者の場合2次調整の省略とするならば、ヨコハケによる2次調整を施す前者を古く考えるのが妥当である。現段階では、一概にこれら埴輪について前後関係を決しがたい。また、IV期とした四ツ屋遺跡のものは、B・C種ヨコハケを多用しており、III期・IV期を通して外面調整のあり方に問題は残る。

川西編年におけるIII期とIV期の大きな違いは、焼成技法の変化とされ黒斑の有無により分けられているが、善光寺平南部地域では腰村1号墳を除き全てに黒斑が認められる。C種ヨコハケが施されていることからIV期と考えた四ツ屋遺跡は、黒斑の有無からするとIII期に位置づけるのが妥当と考えられるが問題も残る。しかし、こうしたことから善光寺平南部地域では、黒斑は須恵器が導入された後（5世紀後半）までも残っており、川西編年と大きく異なるものである。

III期・IV期相当とした円筒埴輪の様相をはじめ、III・IV期の区分・年代等今後解明しなければならない課題は大きい。

（矢島宏雄）

註

- (1) 川西宏幸 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64巻2号 1978年
- (2) 更埴市教育委員会 『長野県森將軍塚古墳』 1973年
- (3) 更埴市教育委員会 『森將軍塚古墳—保存整備事業第1～6年次発掘調査概報—』 1981～1987年
- (4) 立木 修 「円筒埴輪の製作技法」『古代文化』26巻8号 1974年
- (5) 森本六爾 『川柳村將軍塚の研究』 1929年
- (6) 矢島宏雄 「善光寺平の埴輪」『第6回三県シンポジウム埴輪の変遷』 1985年
- (7) 米山一政 「更埴地方の古墳」『更級埴科地方誌』2巻 1978年
- (8) 訳(2)と同じ
- (9) 更埴市教育委員会 『森將軍塚古墳—保存整備事業第6次発掘調査概報—』 1987年
- (10) 矢口忠良 「越將軍塚古墳」『長野県史考古資料編』全1巻(2) 1982年
- (11) 長野県教育委員会 『長野市の埋蔵文化財』第10集 1981年
- (12) 森嶋 稔 「清野四ツ屋遺跡」『更級埴科地方誌』2巻 1978年
- (13) 高崎光司他 「善光寺平南部における古墳の実測調査」『信濃』31巻12号 1979年